日本人の信仰心

２０１１年１２月
西九州伝道所
佐々木正明

現代の日本人に、「神は存在すると思いますか？」とたずねると、大多数は「いいえ」と答えます。日本ほど、唯物論や進化論が浸透している国はないのです。文化人と言われる人たちがこぞって、「宗教は信じません」と明言し、「神は信じていません」と公言してはばからない国なのです。日本人にはごく当たり前なのかもしれませんが、世界的には、むしろ変わった現象です。

ところがこの同じ日本の宗教人口は、国民の 2 倍だというのです。つまり１人の日本人は、平均ふたつ以上の宗教団体に加盟しているということです。これもまた不思議な現象です。もちろん、神道の信徒の数え方が非常におおらかで、地域の氏神様などは、地域住民をすべて信徒にしてしまうところもあるためですが、それにしても大変な数です。

一人の人間を見ても、「神は存在しない」と言いながら、お宮参りをし、お寺に詣でるのは当たり前です。拍手を打ち、賽銭を投げ込み、帰り道にはお墓参りに立ち寄ります。そしてそこになんら矛盾を感じていません。

日本人の多くは、宗教を疑わしいものとして見ています。あまり関わらないほうがよいと警戒しています。「神かもうな、仏ほっとけ」とはよく言ったものです。「触らぬ神に祟りなし」とも言われます。ところがその同じ日本人が、一方では非常に信仰深く、心の奥底ではいつも、何らかの「神的」な存在を感じながら、生活しています。神なんていないと公言してはばからない人が、深山に入り、苔むした巌に向かうと、ついその幽玄さに打たれて、手を合わせ、注連縄を張り、感謝をささげたくなってしまいます。

日本人は心の奥底では、非常に宗教的なのです。そしていつも、自分が生きているのではなく、自分は生かされているのだと、謙虚に感じているのです。大自然の背後に非常に大きな力があり、自分はその力によって息をさせられ、その恵みによって生かされていると、本能的に、あるいは直感的に感じているのです。

ところがその直感的なものをいくらかでも理論的に組み立てようとすると、なんともグロテスクな話になってしまい、はなはだ怪しげな宗教になってしまい、奇怪な教えに迷い込んでしまうのです。そして多くの日本人は、そのような宗教をさげすみ、神はいないと言ってしまうわけです。日本人は八百万の神々を信じていると言われていますが、実際に八百万の神々を信じている人など、ほとんどいません。太陽の神だの月の神だのに始まって、はては猫の神だの豚の神だの鼠の神にいたっては、ばかばかしくて、信じる気持ちにならないのです。

古事記や日本書紀に出てくる神々も、あまりにも幼稚な神々で、私たちが信奉するには値しません。かといって復古神道の神は、キリスト教などの物まねでこれもお話しになりません。賢明な日本人は、自分の心の奥にある本能的な神意識、直感的な神観念を大切にしますが、多神論的な神観念やそこから際限なく発展した偶像礼拝を、基本的にばかげたものとして見ているのです。また、キリスト教的な装いをした復古神道や国家神道を、怪しげなものと見ているのです。ひと時は国民総洗脳で、国家神道を奉じたことはありますが、多くの日本人はそれを恥じています。

そのような崇高な宗教心を持っていながら、自分の宗教心を表現しようとすると、お地蔵様だ、井戸の神様だ、山の神様だ、あっちのお宮だ、いやこっちの神社だとなってしまうことが多いのです。ですから、多くの日本人は、自分の心にある崇高な宗教心を、稚拙な神々を礼拝することで紛らわしながら、それをくだらないものとして退けて無神論を自認しているわけです。

私たちは、そのような日本人の心のそこにある崇高な宗教意識を大切にすべきです。神なんて存在しないという言葉に惑わされず、日本人の本当の宗教心、直感的神意識をもっと理解して、それを尊ぶべきです。日本人は、神に似せて造られた人間の本性を、完全に失ってはいないばかりか、まだまだ鮮やかに持っているのです。

伝統的プロテスタント神学の中には、人間の完全な堕落を解き、人間性の中には、良いものがまったく残っていないかのように言うものもありますが、それは間違っています。堕落した人間にも、神を知る能力が残っています。それにもかかわらず、人間は神の不滅の栄光の姿を、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの姿に似せて拝んでしまったのです。その行為が、さらに神の憤りを買ってしまったというのが、聖書の教えです。

ところが日本人は、見えない神の栄光の姿を直感的に感じて、見える人間や鳥や獣や這うものの姿に似せた像を刻んで、それを礼拝の対象にはしていないのです。もちろん、例

外はどこにでもありますが、一般的に言って、日本人は見えない神を見えないまま崇めているのです。人智では到底知ることも測ることもできない神を、見えない方、理解を超えた方、不可思議な方、超越した方として、そのまま拝もうとしているのです。

私たちが福音を語ろうとするとき、まず、日本人が神の存在を認めなければならないと感じて、「神はいない」という日本人に挑戦します。理屈で神はいることを証明しようとします。そのついでに、あらゆる神々を否定します。あらゆる宗教の悪口まで言ってしまいます。でも日本人は、あらゆる宗教をおろかだと感じていても、宗教心を大切にしますので、ほかの宗教を悪く言うことには賛成しません。大切なのは、自分が心で感じている神意識を尊重することであって、ほかの宗教の欠点をあげつらうことではないのです。

ここで理解しなければならない大切なことは、日本人と神の存在について理論闘争をする必要はないということです。日本人は、口では神は存在しないと言っても、心では神の存在を信じているのです。神は存在しないというときの神は、多くの偶像の神々、古事記や日本書紀に出てきたり、ギリシャ神話に出てきたりするような神々、あるいは巷にあふれているご利益主義の新興宗教の神々、さらには植民地主義を後押しして世界を席巻しようとした、キリスト教の神のような神のことなのです。

私たちは、日本人が昔からそれとなく信じ、崇め、奉り、感謝し、祭りを行ってきた、日本人の心の神について語ればいいのです。そして、その神が天と地をお造りになり、豊かな自然の育みをもって日本を祝福し、日本人を生かしてきてくださった神であることをお話できればいいわけです。